

## 熱性けいれん

町田市民病院 2017年度 第1回市民公開講座  
小児科 山口 克彦

熱性けいれんは主に生後6ヶ月から5歳までの乳幼児期に起こる、通常38℃以上の発熱に伴う発作性疾患です。髄膜炎などの中枢神経感染症、代謝異常、その他の明らかな発作の原因はみられず、てんかんの既往のあるものは除外されます。有病率は7～11%（約10人に1人）で予後は悪くありません。

けいれんが起こった時はどうすればよいのでしょうか？ まずはあわてない。落ち着いて刺激を避け安全な場所へ移します。頭部を低くして顔を横に向けます（分泌物などでの誤嚥窒息を防ぐため）。口の中に物を入れない（舌をかむのはけいれんの最初の瞬間、物を入れると口の中を傷つけたり窒息させたりします）。けいれんが治まるまで必ずそばにいます。

医療機関へ受診が必要な時は、初めてのけいれん、けいれんが治まっても意識がはっきりしない時、部分発作、発熱とけいれんに加え麻痺などを伴う時です。けいれんが5分以上続く時や、短い間隔で繰り返しけいれんが起こればこの間意識がはっきりしない時は救急車で来院しましょう。

2回目以後のけいれんで、原因がはっきりしていてけいれんの持続時間が5分以内の時、けいれんが治まって意識がはっきりしている時は家で様子を見ましょう。

医療機関来院時にはほとんどのけいれんはとまっていることが多いので、けいれんを起こした時の様子（けいれんの続いた時間や手足の動きなど）を見ておいて話していただけると私たちは助かります。

また熱性けいれんの既往のある児にすべての予防接種は可能です。